

様

前略

お手紙拝見致しました。様は9月に入会されてから、化粧品メーカーへ動物実験のことを問いあわせるなど積極的に活動されていて、私たちJ A V Aのスタッフは、これからも様とは一緒に活動することを楽しみにしておりましたが、突然このようなことになり、とても驚いております。特にその原因が、J A V Aの活動に対する不満や不信といったものでなく、恐らく野上さんから送られた資料の内容を信じ込まれてのことと思われるだけに、非常に残念に思っております。

お手紙の中に、「1995年に起きた渋谷派によるJ A V Aの乗っ取り事件」とありましたが、95年当時には、「野上さんの辞任」に関連してJ A V Aに対する様々な誹謗中傷の文書が配られ（たぶん様が読まれたのと似た内容の文書です）、それを受け取った人たちの中には、「J A V Aが乗っ取られた」などとまことしやかに言う人もたくさんいましたので、当時のことを全くご存じない。様が、一方的に送られた文書だけを読み、その内容を信じてしまわれたのも無理からぬことと思っております。

でも、折角今までJ A V Aの会員として活動してこられた様が、本当の事実を知らないまま、J A V Aに対する誤解を抱えたまま辞めてしまわれるのはいかにも残念です。その当時何が起こったのか、様には正しい事実をお伝えしたうえで、ご判断を仰ぎたいと思い、突然で驚かれることとは存じますが、裁判の判決文（当時の事実関係が詳細に書かれています）も同封させていただき、95年当時起こった出来事を多少長くなりますがまとめてみましたので、お読みいただければ幸いに存じます。

J A V Aは、1986年に設立された市民団体で、初代の会長は「栗原桂子さん」という方で、その後91年に事務局長制度とスタッフ及び運営委員による運営制度が設けられ、その当時会の事務職にあった野上さんが事務局長となり、95年に椎名、97年に伊東、そして現在は私が事務局長の役職についています。

ちなみに、野上さんは有給の専従事務職でしたが、野上さんが起こした事件への反省から、その後、事務局長と運営委員については、J A V Aから金銭はもらわない、つまり動物活動で利益を得ることは絶対にしない方針を貫いています。

トラブルが起こったのは、1995年3月の「野上さん辞任」に関連してのことでした。3月21日のスタッフ会議で、野上さんから辞任の申し出があり、スタッフと運営委員全員の13名（1年近くJ A V Aを休んでいた1名を除く）が、その辞任を承認しました。

辞任にともない、次の事務局長が全員一致の推薦で椎名さんに決まり、渋谷への引っ越しも正式に稟議を通り、決定されました（というのは、千駄木にあったＪＡＶＡの事務所は野上さんの自宅から2分の所、殆どのスタッフにとってとても不便な場所で、1～2時間近くかけてかよっていた為です）。通常ならばこれでスムーズに事務局長の交替がされるはずだったのですが、その1週間後、突然野上さんが、「これは、私を追放するための陰謀だ、乗っ取りだ。新しい事務局長など認めない。」と言い始めたのです。数日後に迫った総会は、混乱することが必至の状況でしたので、緊急のスタッフ会議の結果、やむなく延期が決定されました（数ヶ月もかけて総会の準備をしてきたのはスタッフですから、延期をしたくてする訳がありません）。

そうしたところが、4月1日になって、突然、「事務局長野上ふさ子」の名前で、「スタッフが窃盗を働いたので、事務局長の権限で除名する」といったハガキが、当時4000名近くいた全国のＪＡＶＡ会員へばらまかれたのです。すでに、新しい事務局長のもと、スタッフ会議の決定に従って渋谷の事務所で業務を開始していたスタッフの所には、そのハガキを見て「事務局長の野上さんがウソを言うわけがない。スタッフは盗んだ金を返せ！」と、連日怒鳴り込みの電話がかかり、会費の返還請求が100通近く届き、心無い人からの脅迫のファックスがスタッフの自宅へ届いたり、自宅の留守番電話に連日のようにいやがらせの電話がかかってノイローゼになったスタッフもいました（スタッフ全員がこういった被害に会い、今も私の手元にはそのファックスが残っています）。

このハガキに続いて野上さんは数々の印刷物（すべて、事務局長を辞任したことは隠してありました）を会員に送り、ＪＡＶＡのスタッフは窃盗を働くいかがわしい人間であると宣伝し続けました。

その他、95年当時、ＪＡＶＡに対して行なわれた妨害行為としては・・・

◆郵便物が渋谷の事務所に届かなくするために、偽の転居届けを出しました

→これは明らかに違法行為です。

◆銀行と郵便局に対して、スタッフが窃盗を働いたという偽の情報を流してＪＡＶＡの活動資金を凍結してしまいました

◆マスコミや行政機関に対して、「ＪＡＶＡ事務局長野上ふさ子」の名前を詐称して虚偽の情報を書き連ねた文書を送りました

→この行為によって、ＪＡＶＡだけでなく動物保護団体に対する信用が損なわれました。

◆パネル展を開く会員に対して、「盗んだパネルを展示することは犯罪だ」という文書を送り付けました。また、95年9月にＪＡＶＡが開いたパネル展会場にも、野上さんから頼まれたと名乗る数人の男性が乱入して、ＪＡＶＡを誹謗中傷するビラをまくな

どのあからさまな妨害を行ないました。

◆95年当時からＪＡＶＡは、化粧品動物実験反対キャンペーンを行っており、会員の皆さんが化粧品メーカーに積極的に働きかけていました（ 様のされている活動です）。その働きかけに応える形で、日本では初めてプリベイルとザ・ボディショップが動物実験反対を表明すると約束してくれました。ところが野上さんは、この２社に対してさえ「ＪＡＶＡに協力すると、犯罪に加担することになる」といったいやがらせの手紙を送りつけました

→幸いにも両社とも、野上さんを相手にはせず、動物実験反対の方針を公表し、この運動が前進するきっかけになりました。

このような数限りない妨害行為のため、ＪＡＶＡは正常な活動が全く出来ない状態に陥ってしまったのです。

このままではＪＡＶＡ自体が崩壊してしまう、という強い危機感を持ったスタッフは、弁護士と相談した結果、野上さんを除名したうえで、「ＪＡＶＡに対する妨害行為を止めさせてほしい」といった訴訟を東京地裁へ起こすことを決定しました。

仕事や家庭を持ちながらＪＡＶＡの活動を続けていたスタッフにとって、そのうえ裁判を抱えるとなれば、通常の生活ができない程の大きな負担がかかることは目に見えていましたが、ＪＡＶＡを存続させるためには、つまり動物実験廃止運動を存続するためには、他に道はありませんでした。

この裁判は、裁判史上例をみないほどのスピード判決となり（7ヶ月で判決が出ました。ＪＡＶＡが活動できない窮地に陥っていることに、裁判官がとてもよく理解を示してくれたのです）、ＪＡＶＡの訴えが100%認められ、「野上ふさ子は、ＪＡＶＡを名乗ってはいけない」という判決、つまり「事務局長を辞めていながら、事務局長を名乗ることはＪＡＶＡに対する妨害行為である。今まで続けてきたＪＡＶＡへの妨害行為を止めなさい。」といった、明確な判決が下されたのです。

3月21日、スタッフ13名の前で、野上さんはＪＡＶＡの事務局長をはっきりと辞めたのですから、この判決は全く正しいものであり、この判決によって「野上さんの辞任が事実であること」「野上さんの行為が、ＪＡＶＡの活動に対する妨害であること」が認められたのでした。

ちなみに 様のお手紙にある「スタッフ全員に脅迫まがいの文書を送った」というのは、ありえないことです。なぜなら、野上さん一人が辞任したのであって、スタッフは全員、その後もＪＡＶＡのスタッフとして残っており、野上さんと一緒にやろう、といったスタッフは誰もいなかったのですから。

以上のようなことが、野上さんの言う「渋谷派によるＪＡＶＡの乗っ取り事件」のあら

ましですが、ここで、様は、「それ程までに執着している事務局長を、なぜ、野上さんは自ら辞めると言ったのか？」といった疑問を持たれると思います。

実は、この「野上さんの辞任」は、実質上の「解任」に等しいものだったのです。

JAVAは純然たる市民団体ですので、その運営は会則に定められる通りに公正に行なわれなければならない、ある特定の個人が利益を享受することがあったり、その立場を利用して地位や名声を得たり、ましてや会を私物化する、などということは許されるはずがありません。ところが、94年頃、事務局長職にあった野上さんによる「JAVAの私物化」は、スタッフの誰の目から見ても、目にあまるものでありました。

数ある出来事の中から、ほんの数例をあげてみますと・・・

◆野上さんは、野上さん個人に課せられた追徴課税をJAVAの会計から払うように要求

→運営委員会で否決されました。

◆野上さんの書いた本を、JAVAが買い上げるよう要求

→94年までは、野上さんの著作の殆どをJAVAが買い上げていました。

◆野上さんのアパートの家賃の半額をJAVAで負担するよう要求

→94年までは、半額をJAVAが支払っていました。

◆書籍からパソコンなど高額な機器に至るまで、独断で勝手に買ってしまう

→94年に稟議制度を設けるまでは、野放し状態でした。実際、100万円近い事務機器を購入したものの、殆ど使わなかったということもありました。

◆JAVAとして行なった講演の謝礼を、JAVAの会計に入れずに、野上さん個人の収入にしてしまうことが度々あった。

◆会員からの寄付金を、JAVAの会計に入れずに個人の収入にしてしまった。

この「寄付金着服事件」が発覚したことで、野上さんへの不信感は、スタッフの間で決定的なものとなりました。

私たちスタッフはボランティアの立場でJAVAに参加しており、会員から会の運営を任されている責任がある以上、動物のために寄せられた会費がこのような形で無駄に使われるのを知りながら、それを黙って見過ごすことはできませんでした。さらに運営や経理上のことだけでなく、活動面においても、長年事務職にあって会報の編集やマスコミ受けを重視する野上さんと、実践的な動物のための活動を最優先すべきというスタッフとの間では様々な食い違いが生じ、このようなことが幾つも重なった結果、数年来一緒に活動してきたスタッフの誰もが野上さんを信頼できなくなっていたのです。

実際、野上さんは、3月21日、辞任公表のスタッフ会議の席で「私はスタッフから信頼されていないようだ。JAVAを辞めて、執筆活動に専念する。自分の会を作るつもりだ。」とおっしゃいましたので、会則などに縛られずに誰の意見も聞く必要のない、

自分の思うようにできる私的な会を作りたい、というのが本心だったのでしょう。

今、野上さんは、ALIVEとAVA-netという二つの会を持っていますが、会計報告もされず（つまり会費の使い道が分からない）、ALIVEにおいては会則さえ持たないと聞いており、このように不透明で私的な会が果たして動物活動を行なう市民団体として正しい姿なのか、といった疑問を抱かざるをえません。

さらに、「JAVAを名乗ってはならない、JAVAの活動を妨害してはならない」という明確な判決が出て3年以上たった今も、野上さんはホームページなどでJAVAの名前を使い、「JAVAが改名してAVA-netになった」と宣伝をしています。

そのため、「JAVAに入ろうと思ってホームページを見たところ、JAVAが無くなったとありましたが・・・」と問いあわせてくる人や、「間違ってALIVEに入会してしまった。騙されました。」と訴えてくる人が何人もいるのです。

今まで4年半の間、私たちは、数限りない誹謗中傷の最中でも一切弁明はせず、判決が下された時に、会員に対して判決文を送付して事実関係をお知らせしたにすぎません。それは、限られたわずかな時間と、会員から寄せられる貴重な浄財をできる限り動物の活動のためだけに使いたい、といった強い思いがあったからです。

私たちの活動を見て貰えば、本当に動物のことを救いたいと願っているJAVAの会員ならきっと分かってくれるはずと思っていましたし、今現在もJAVAのスタッフは皆そう思って活動をしています。現に、野上さんがトラブルを起こした時は700人までにまで減ってしまった会員数も、今は2000人まで回復しています。

そして、5年前のJAVAと比べて何よりも良くなったと思うことは、JAVAがスタッフ相互の信頼関係のうえに立って運営・活動できる民主的な会になったという点です。今のJAVAには、スタッフや会員は皆対等に自由に意見を言える雰囲気があり、どうしたら動物のおかれた状況を少しでも良くできるかと、日々真剣に切磋琢磨し合いながら活動を行なっています。同封しました会計報告をご覧いただければ分かりますように、人件費に関しても常識では考えられないくらい低く押えるなど、経費をぎりぎりまで切り詰めておりますのも、皆さまから寄せられる会費を一円でも多く動物のための活動に使いたいとの考えからです。

心から動物たちを救いたいと願っている 様ならば、きっと事実を分かっていただけと思い、このような長い手紙になってしまいました。お許し下さい。

また、様とご一緒に、活動できる日が来ることを信じております。どうかご自愛のうえ、長く動物のために活躍されますようお祈り申し上げます。 草々

平成12年1月6日

JAVA事務局長 服部文恵